

国立国語研究所学術情報リポジトリ

On some uses of adnominal forms in Japanese verbs

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-02-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 太郎, TAKAHASHI, Tarô メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001764

動詞の連体形「する」「した」についての一考察

高橋 太郎

1 問題のありか

1) 連体的につかわれた動詞の過去形が、述語につかわれたばあいとちがった用法をもつことは、まえから知られている。時枝誠記⁽¹⁾は、「尖った帽子」「曲った道」「さびた刀」などの「尖った」「曲った」「さびた」などを連体詞とし、これらの「た」は、過去・完了をあらわす助動詞でなく、連体詞をつくる接尾辞だといっている。また、この「た」は、起源的には、接続助詞「て」に動詞「あり」の結合した「たり」であるから、存在・状態をあらわす詞であるとみとめて、「あれたる宿」「老いたる人」などの例もあげている。この見方は、現在までひきつがれ、ここ二・三年のあいだにでた、松村明編の「助詞助動詞詳説」⁽²⁾や「日本文法大辞典」⁽³⁾などでも、それを多少ひろげた形で解説されているし、吉田金彦の「現代語助動詞の史的研究」⁽⁴⁾なども、その線にそっている。

これらの例、さらに「冷した」「焼いた」「ああした」「関した」^(3,5)などが存在・状態・属性などをあらわすということには、わたしは異存はないし、またそれが「て+あり」→「たり」からきたこともみとめる。しかし、それを助動詞「た」の性格によってのみ理由づけ、連体形であるということの意味を強調しないことについては、つぎの二つの理由によって、同意しかねる。

その一つは、終止形との関係である。終止形の「た」も、人のとくように同じ起源をもつ。とすれば、連体形に特有なズレを、助動詞「た」の一般的な性格にもとめることはできないはずである。

もう一つは、「た」のつかない連体形もこの用法をもつことである。「関した」「そうした」「そういった」を連体詞というなら、「関する」「そういう」も

連体詞といわなければならない。「そびえた山」の「た」が属性をあらわすというなら、「そびえる山」の何が属性をあらわすといえよいのだろうか。

つまり、連体形のもつ、こういう終止形からのズレは、いわゆる助動詞「た」の用法としてそうなるのではなくて、動詞の現在形「する」や過去形「した」が、一定の条件のもとで、連体的につかわれることによっておこってくる、あるいは、のこってきた現象であるとかんがえるほうが妥当である。

伝統的な日本の文法論では、動詞の「した」という語形を「し」と「た」という二つの「単語」にわけ、文法的なやくわりを助動詞にしか負わせなかった。したがって、「た」の連体形は観察されても、助動詞のつかない現在形「する」の連体形の文法的なやくわりは、連体的につかわれるという、機能の面だけしか注意されず、そのもつ文法的な意味の側面は、無関心のまま放置されていた。その結果がこんな不十分な説明をゆるすのだろう。時枝自身がいっているように、「このやうな用法はすべての動詞にあるわけではない」。つまり、これは「た」の用法でなく、ある種の動詞の過去形の用法なのである。

2) こういう伝統的なとらえかたに対して、松下大三郎・小林好日・佐久間鼎・金田一春彦・三上章・三尾砂・宮田幸一・日下部文夫らは、「する」や「した」を動詞のテンスをあらわす語形としてとらえたが、さらに、鈴木重幸は、この二つの語形の、テンスのカテゴリーとして対立するようすをあきらかにした⁽⁵⁾。

鈴木重幸は、「する」「した」の用法は、述語につかわれるばあいと連体的その他につかわれるばあいとでことなった面があるとして、述語につかわれるばあいだけをとりあげた。本稿は、鈴木のしのこした、連体的につかわれたばあいの「する」と「した」の一側面、とくに形容詞に似た側面についてのべようとするものである。

3) いわゆる形容動詞は、述語につかわれるばあいには、「きれいだ」「きれいだっ」となり、連体的につかわれるばあいには、「きれいな」「きれいだっ」となって、現在形がかたちをかえる。また、コンピュータ「だ」をしたがえた名詞も、述語では「山だ」「山だっ」、連体では「山である」「山だっ」とかたちをかえる。ところが、動詞は、述語のばあいでも、連体的用法のばあい

でも、「よむ」「よんだ」であって、かたちをかえない。

このように、動詞の現在・過去の両語形は、「述語につかわれたばあい」と「連体的につかわれたばあい」とが同語形なので、一つの語形の別の用法としてとらえることもできる。しかし、あとでのべるように、連体的な用法における《する←→した》の対立は、単に《現在・未来←→過去》というテンス的な対立だけでなく、《進行←→状態》というアスペクト的な対立の面がつよくあらわれ、また、ときに共通の状態性をあらわしもして、終止的な用法における対立とかなりことなるので、この稿では、これを同一語形の別用法とみず、別のホモニム語形としてあつかう。そして、一方を「終止現在形」「終止過去形」(まとめて「終止形」)とよび、他方を「連体現在形」「連体過去形」(まとめて「連体形」)とよぶことにする。なお、カテゴリーとしての位置づけは、つぎのパラダイムによって、しめすことができる。鈴木重幸のとりあつかったのは、——のある二形(四形)であり、この稿でとりあげるのは、〜のある二形である。

4) 連体形の意味用法が終止形のそれとことなるのは、過去形「した」だけ

機能(職能) function	終止形 finite forms				連体形 adnominal forms		
	断定形 indicative forms		意志形 volitional form	命令形 imperative form			
	現在形 present form	過去形 past form			現在形 present form	過去形 past form	
ていねいさ formal-informal	基本動詞 informal verb	<u>よむ</u>	<u>よんだ</u>	よもう	よめ	<u>よむ</u>	<u>よんだ</u>
派生 original-derivational	ていねい動詞 formal verb	<u>よみます</u>	<u>よみました</u>	よみましよう	よみなさい	(よみます)	(よみました)

ではない。連体現在形「する」も、終止現在形「する」とことなつた意味用法をもっている。たとえば、例文(1)の「降る」「舞ひ降りる」は、現在における動作の進行をあらわしているが、終止現在形にはこの用法がなく、もし述語につかわれるならば、この文の述語「吸ひこまれてゆく」がそうであるように進行をあらわすアスペクト動詞⁽⁶⁾にして、「ふってくる」「ふっている」「まいおりてくる」などにかえなければならない。

(1) 伸子が窓ぎはに佇んで飽きずに降る雪を見てみると、あとからあとから舞ひ降りる白い雪片が、スッスッと鉄骨の暗い穴の中へ吸ひこまれてゆく。(宮本百合子 道標)

(2) 甲州に跨る山脈の色は幾度変つたか知れませんが。(島崎藤村 千曲川のスケッチ)

また、例文(2)の「跨る」は、その時点現在での状態をあらわしており、述語につかわれるばあいには、状態持続のアスペクト動詞「している」をつかつて「甲州にまたがっている」としなければならない。

5) 連体形「する」「した」は、進行・状態をあらわす用法のひろがり終止形よりもひろいので、一見その用法がルーズであるようにみえるけれども、その用法は、やはり一定の法則によつてしぼられている。たとえば、例文(2)の「跨る」は、「またがった」にかえても、依然としておなじような状態をあらわすが、例文(1)の「降る」は、「ふった」にかえると、進行の意味をうしなうので、この文のなかではかえることができず、「舞ひ降りる」は、「まいおりた」にかえると、到着結果の状態をあらわすので、意味がかわってしまう。

6) 連体形「する」「した」のあらわす文法的な意味を規定する条件の一つは、動詞の性格である。たとえば、「ふる」や「まいおりる」が現在形で進行をあらわすのは、それが動作動詞だからであり、「またがる」が現在形で状態をあらわすのは、これが状態動詞相当になりうる結果動詞だからである⁽⁷⁾。また「まいおりた」が到着結果の状態をあらわすのは、移動動詞だからであり、これは、例文(3)の「来た」とおなじである。

(3) テーブルのところへ来た素子が、瀬川に「いろいろお世話さまでした」と律気にお辞儀をした。(道標)

なお、動詞の性格に言及するときは、厳密でなければならない。吉田金彦は

「改まる」「知る」「酔っ払う」などを状態語、「あきれる」「困る」などを形状語といているが⁽⁶⁾、なにを「状態語」「形状語」だというのかを示していない。「助詞助動詞解説」では「冷やす」「焼く」などを「本来意志的な動作を表現する動詞」といている⁽⁹⁾が、これらは「してある」の形で対象の結果をしめす対象結果動詞⁽¹⁰⁾であって、この種の動詞が意志的動作を示すというプロセスの側面と、対象の結果をしめすという結果の側面とをもった二面構造の動詞であることへの考察がかけている。

7) 連体形「する」「した」の実現する文法的な意味を規定するもう一つの条件は、連体修飾の構造である。この構造というのは、カザリとしての動詞または動詞連語とカザラレとしての名詞とがどことなくみあわせをつくりだしているかということである⁽¹¹⁾。たとえば、例文(2)の「跨る」を「またがった」にかえられるのは、「場所名詞＋結果動詞」というカザリ連語がカザラレ名詞のしめすものの存在の状態をあらわすとき、現在形と過去形の両形がつかわれるという連体修飾の構造にもとづいているのである。したがって、(4)(5)の「添った」「来た」も「そう」「くる」にかえることができる。

(4) やがて棺はそこから裏の林に添った墓地へと運ばれて行った。

(田山花袋 時は過ぎゆく)

(5) 日本橋から来た道は、ここで二つにわかれる。

おなじ単語でも、この構造をもたなくみあわせでは、両形をつかうことができない。たとえば、(3)の「きた」や(6)の「またがった」を現在形にかえると、意味がかわってしまう。

(6) むこうから馬にまたがった人がくる。

8) 連体形「する」「した」がどんな条件のもとでどんな文法的な意味をあらわすかということの観察をとおして、現代日本語動詞の連体形の性格に接近しようというのが、本稿のねらいである。

動詞の連体形は、さきにしめたパラダイムにもみられるように、ムード語形をもっていない。また、ていねい動詞「します」があまりつかわれなない。たとえば、今まであげた6例の連体形をていねい動詞にかえることによって、その不自然さ、または、ごていねいさがわかる。このようにパラダイムを占め

る量が終止形よりすくないことは、動詞という品詞にそなわったカテゴリーを、よりすくなく保有していることであり、その点で、連体形の動詞らしさは、終止形のそれよりおとるだろう。

連体形が動詞らしさをうしなっていくという傾向は、さらに、連体形「する」「した」のもつ意味用法そのもののなかにみいだされる。それは、あとでべるように、動詞の連体形の、動作をあらわす側面がよくなり、それにかわって、状態や属性をあらわす側面がおもてにでてくるということである。このことは、動作主 agent が何であるかがとわれなくなって、ヴォイス性をしめず形式が欠けたり、テンスやアスペクトの関係でつかわれるカザリがつかえなかったりすることによって、形式の上でも証拠だてられている。(この稿でも「する」や「した」のもつ意味をしめすために、「している」「していた」「してある」「してあった」などにおきかえることがあるが、それは便宜上の手段であって、ほんとうにかえると、テンス性・アスペクト性・ヴォイス性など、動詞の性格が変わってしまう。そのことについても、あとでふれる。)

連体形は、このようにして、動詞らしさをうしない、ちょうどヨーロッパ語において分詞 *participle* がはたしている役わりのうちの連体的な部分のような役わりをはたしてくるのである。おそらく、連体的用法をうけもつという機能そのものが、動詞性から形容詞性へという性格の変換を方向づけるのだろう。

9) しかし、連体形のもつ形容詞性というものは、連体形一般の性格ではない。ちょうどヨーロッパ語において関係代名詞や関係副詞にみちびかれるクローズの述語動詞がそうであるように、動詞らしさを多分にそなえた連体形が厳として存在している。たとえば、文例(7)の「切腹した」という過去形は、過去というテンス的な意味をしめして、いわゆる完了をしめすのではない。そしてまた、この動作の動作主は、「人達」であって、この「切腹した」は、りっぱに動作をあらわしている。この「切腹した」は、終止形のばあいと同様、動詞らしさを十分にそなえているといわなければならない。

(7) あの時切腹した人達だって、今になれや死ななくてよかったんだ。(時は)

10) 本稿では、動詞の連体形が、動詞らしさをもっているものから、動詞ら

しさをもたないものへと、どのようにうつっていくかをしらべ、その動詞らしくなさというものがどういう性格であるかを検討し、そのことからどういうことがおこるかということを追求めたいとおもう。

いま、わたしは、動詞的な用法から非動詞的な用法へうつるとかいた。これは、現代語の終止形の用法を基準にして、そこからのへだたりという方向で分折していったからである。しかし、おそらくは、はじめ終止形と連体形の用法とがあまり分化していず、そのうち終止形の用法のなかでテンスとアスペクトが次第に分化してくる過程で、連体形も影響をうけ、すこしずつようすをかえてきているのだとおもう。そうしたことは、実は、古代語から歴史をおって、しらべないことにはわからないことである。いままで伝統的な国語学では、「したり」を「し」と「たり」にわけ、「したり」の用法を「たり」の用法としてとらえてきた。同時に「す」「する」がテンスやアスペクトの側面からとらえられなかった。そのため、わたしがいまここに問題にしているようなことは、研究されてこなかった。したがって、いま、わたしは現代語の内部で処理せざるをえないのである。

なお、本稿では、連体形の用法の非動詞化の傾向に焦点をあわせているので、動詞性のつよい用法にあらわれるテンスのありかたについては、積極的な追求をこころみなかった。

2 現在形の用法

11) 終止現在形は基本的な用法として、未来の動作と現在未来の状態をあらわし、そのほかに、ポテンシャルな用法をもつ⁽⁴²⁾。これらの用法は、連体現在形のなかにもみられる。

(8) わたしがするさきの病氣までわかると都合がいいんだけど。(道標)

(9) で、二人は海外から来る返事を待った。(時は)

(10) 長火鉢のある茶の間の向うの(時は)

(11) 瀬川が熱心に舞台を見ながら、棧敷の前列にゐるゆづりたちにささやいた。

(道標)

(12) ここかしこに見える大石には秋の日があたって、

(島崎藤村 千曲川のスケッチ)

(13) この周どのの毎朝髪を香はせる油は (島崎藤村 桜の実の熟する時)

(14) ねえ、あれ程お弾きになる方は、黒人の中にだって (野上弥生子 真知子)

この例文(8)(9)の「する」「来る」は未来の動作を、(10)~(12)の「ある」「いる」「見える」は現在の状態をあらわしている。また、(13)の「香はせる」はくりかえし、(14)の「お弾きになる」は能力・性質をあらわしていて、ともにポテンシャルな用法である。

なお、動詞の連体形のあらわす未来・現在・過去は、例文(8)のように、話し手の話す時点を基準にするばあいと、例文(9)~(12)のように主文のテンポラリティー等を基準にするばあいとがあつて、連体形のテンスのありかたを積極的に問題にするばあいには、そのことをあつかわなければならないが、本稿はそこに主たるねらいをおいていないので、原則として、両者のちがいにふれなかった。「主文のテンポラリティー等」としたのは、例文(10)のように、さらに別の基準があるからである。)

これらの三種の用法のなかで、未来をあらわす用法は、比較的すくない。また、この三種のほかにも、つぎのような用法をもっている。

2-1 現在の動作の進行をあらわす用法

12) 現代日本語動詞の終止現在形が現在(進行中)の動作をさししめすことができないのに対し、連体現在形は、これをさししめすことができる。

(15) ドアの外に去る彼の後姿を眺めながら真知子は考へた。(真知子)

(16) 白地に赤で、旗を押したてて前進する群集の絵が表紙についていた。(道標)

(17) コトコト鳴るスチームの音をききながら、伸子は、(道標)

(18) 奥深い店の入口から土蔵の方へ纏節の荷を運ぶ男なぞが眼につく。(桜の)

(19) 夜は白粉を真白にぬった女が黄い声を出して道行く人々の袖を引いた。

(時は)

例文(15)~(19)のなかの連体形は、いずれも現在のアクチュアルな進行動作をあらわしており、(19)のように「いく」「くる」がつかわれているばあいのほかは、そのままの形で終止形につかうことができない。

この用法でつかわれる連体形は、テンス的には、現在をあらわすが、アスペクト的には、動作の進行をあらわす。しかし、そのあらわす進行的な意味のばは、進行をあらわす専門的なアスペクト動詞、「してくる」「していく」「し

ている」よりもひろい。たとえば、うえにあげた⑮～⑲は、すべて進行動作をあらわしているが、このばあい、「去っていく」「前進していく」「前進してくる」「前進している」「鳴っている」「運んでいく」「運んでいる」などにいかえられるように、この三者のアスペクト動詞のあらわしうる進行的意味をすべてふくんでいる。(ただし、この三者は、それぞれほかの意味をもあらわしうるのだが。)

13) 動詞が連体形において特有の意味用法をもつとすれば、その用法でつかわれてきた動詞の形態論的な性格も、連体的な用法を本務とする形容詞や連体詞に似てきて、動詞本来の性格をうしなっていはしないか、ということがうたがわれなければならない。そこで、この用法でつかわれる連体形のもつ動作性、テンス性などについて、さらに検討をくわえたい。

連体現在形の動作の進行をあらわす用法では、(あとにのべるポテンシャルな用法の一部とちがって)いつも動作主があきらかにされている。いままであげた文例⑮～⑲では、どれもカザラレ名詞がカザリ動詞のしめす動作の動作主をあらわしていたが、カザラレ名詞が動作主をあらわさないばあい、この動詞は、たいてい動作主をあらわす名詞とくみあわさって、カザリ連語をかたちづくっている。

⑮ 雪の降りしきるその横町には人通りもない。(道標)

⑯ 山師の遣ふ鯉につれて、大きな枝は凄しい音を立て、落ちた。(時は)

⑰ 実の勉強するランプの灯ばかりが遅くまで四盞半を照らした。(時は)

そして、動詞が動作主をあらわす名詞とカザリ連語をつくっていないばあいでも、文または文脈のなかで動作主があきらかにされているのがふつうである。

⑱ 伸子は、ずっと奥まで歩いて行って、目ざす番号のドアのベルを押した。

(道標)

このように、いつも動作主があきらかにされていることは、動作性のつよさをしめしている。

14) 基本動詞の連体現在形「する」が動作の進行をあらわすのは、現在の動作をしめすばあいにかざられる。この点は専門的なアスペクト動詞が≪してい

る↔していた》《してくる↔してきた》《していく↔していった》などの対立形をもって、時に関係なく進行をあらわすのとなつてゐる。この用法の「する」は、積極的に進行をあらわすのでなく、進行しつつある動作を一時点できって、そのとき動作があることをしめしているだけなのである。このことは、例文⑭で「住んでゐる」がずっとまえからの継続をしめすのとくらべると、はっきりする。こういう点をかんがえると、この用法の「する」のAspect性は、「している」「してくる」「していく」よりもよわいといえよう。

⑭ 凡そこの町で昔から古く住んでゐる人達は皆此処に集まって来た。（時は）

⑮ すぐ前を、人々に稍々おくれ歩いてゐた河井から話しかけられた。

（真知子）

また、「している」「していた」が、⑮のように話している時点を基準にした時をあらわしうるのに対して、「する」のほうは、主文のテンポラリティー等を基準にしたばあいの現在にしかつかえないことは、テンス性のよわさをしめしている。

15) つぎに、連体現在形で現在進行する動作をあらわす動詞の種類についてのべる⁽¹³⁾。動詞は、終止現在形が現在の状態をあらわすかどうかによって、状態動詞と動作動詞にわかれるが、状態動詞は、この用法をもたない。

動作動詞のうち、金田一が第四種の動詞としたのも、だいたい、この用法をもたない。

動作動詞は、継続動詞か瞬間動詞かによって、また、結果動詞か非結果動詞かによって、それぞれわけられ、この十字分類によって、四種類にわけられるが、継続動詞か非結果動詞かのどちらかであれば、この用法をもつ。また、瞬間動詞であっても、方向性があって、「してくる」「していく」のかたちで進行をあらわす動詞(⑯) および「いく」「くる」(⑰~⑱)は、この用法をもつ。

⑯ 体の暖い若い顔にかかる雪がうれしいのだろう。（道標）

⑰ 駅からホテルまで来るタクシーの窓から（道標）

⑱ 買物に行く米子と連れ立って暗い道に出た時（真知子）

このように、この用法でつかわれると、結果動詞も、その動作のプロセスをあらわす側面がはたらき、動作動詞ならばたいていのものがこの用法をもつ

であるから、かなりつよい動作性をしめすものといえよう。

ただし、あとでのべるように、結果動詞⁽⁴⁴⁾が、存在や所有や関係をしめす状態のくみあわせのなかでつかわれるばあいには、この用法にならず、(29)~(31)のように、状態をあらわす用法となる。

(29) 自分を取り巻くあの堪らない生活から脱け出したい。(道標)

(30) 年頃の息子や娘を持つ母親たちに(真知子)

(31) 秘密漏えいにからむスキャンダル

2-2 状態をあらわす用法

16) 連体現在形に現在未来の状態をあらわす用法があることは、すでに、例文(10)~(12)でしめた。これらの例では、連体現在形になっている動詞は状態動詞である。しかし、例文(29)~(31)にしめたように、終止現在形では状態動詞としてはたらかず、アスペクト動詞「している」になってはじめて状態をあらわす結果動詞が、連体現在形では、状態動詞のように、状態をあらわすことがある。この用法は、カザリとなる動詞または動詞連語とカザラレ名詞とがつぎのような関係をもつばあいにあられる。

17) カザリがカザラレ名詞のさししめすものの(空間的な)存在のしかたをあらわすくみあわせのなかでは、結果動詞の連体現在形が状態をあらわす。

(32) 甲州に跨る山脈の色は幾度変わったか知れません。(千曲川)

(33) 街々をうすくおほふ霧にきがついたとき(道標)

(34) 表玄関からホールを仕切る大扉の欄間が(道標)

(35) 校堂を囲繞く草地の上には(桜の)

(36) それだけ胸に満ちる歓喜も大きなもののように思って来た。(桜の)

(37) クラウドは、瞬間、遠い記憶のなかに浮ぶ絵と(道標)

これらの動詞は、動詞そのものもつ性格によって状態をあらわすというよりも、このくみあわせにおかれることによって状態をあらわすというべきであろう。たとえば、おなじ「またがる」でも、現代語では、存在のしかたでなくくみあわせのなかでは、つぎのようないかたはできないであろう。

× あそこから馬にまたがる人がきた。

「むかう」「くる」などの動詞は、人・動物・のりものなどの動きをあらわすが、その主体が「道」のような場所であるばあいには、存在のしかたのくみ

あわせになって、状態をあらわすことになる。

- (38) 二人は支那門に向ふ踏みつけ道を行つた。(道標)
- (39) これは鎌倉からくる道だ。
- (40) 支那門とよばれてゐるクレムリンに相對するもう一つの門へ(道標)

18) 存在のしかたのくみあわせは、関係のしかたのくみあわせにつながっていくようである。ここでも結果動詞の現在形が状態をあらわす。

- (41) その流れに添ふ家々は(千曲川)
- (42) あれから南に続く甲州街道は(千曲川)
- (43) 仲子の知らないソヴェトの機関に属す一定の人々の(道標)
- (44) 哲学に關係する表現として(道標)
- (45) 当社の興亡にかかわる事件なので
- (46) ロシアに關する書物を取り寄せて(真知子)
- (47) 他の電氣や蒸氣の機械力に依るそれとは(真知子)
- (48) リン博士は、それらの中国のどの顔ともちがふ落ちつきと、深みと、いくらかの寂しみをもってあらはれてゐる。(道標)

19) 動詞連語のカザリが所有・担当の状態をあらわすときも、連体現在形は状態をあらわす。

- (49) 玉子は……どこか邪氣ないところを有つ人だった。(桜の)
- (50) 門の入口に門番小舎を持つ大使館は(道標)
- (51) その言葉の持つ重要性のために(真知子)
- (52) 留守を預るおばあさんから(桜の)

20) つぎのようなばあいも、くみあわせのなかで動詞がうごきのない状態をあらわすので、連体現在形が状態をあらわす。

- (53) 捲毛の泡立つ頭をちよつとかしげて(道標)
- (54) 捲毛の過まく頭をすこし傾けながら(道標)
- (55) かさばる物は(真知子)
- (56) 一族がふりかざしたものは林立する十字架だった。(道標)

21) 状態をあらわす連体形の用法をもつ動詞は、状態動詞と、一部の結果動詞である。この二種類の動詞は、連体現在形をみるかぎりにおいては区別しがたいが、連体過去形との関係でやはり区別しなければならない。なぜなら、状態動詞のばあいは過去形にすることによって過去の状態をあらわすのに対し、結果動詞のばあいは、過去形にすると結果動詞の側面がうかびあがって、現在

形と過去形とがおなじ状態をあらわすからである。

- (10) 長火鉢のある茶の間（現在の状態）
→長火鉢のあった茶の間（過去の状態）
- (11) 流れに添う家々（現在の状態）
→流れに添った家々（現在の状態）

このようにして、例文(29)～(66)の連体現在形は、すべて過去形にかえても、おなじ状態をあらわす。

- (○ 流れにそっている家々（現在の状態）
→流れにそっていた家々（過去の状態）)

22) この用法では、動詞が動作でなく、状態をあらわしている。したがってその主体も動作主ではなくて、状態のもちぬしである。ということは、結果動詞のもつプロセスの側面ではなく、結果の側面がおもてにでているのである。その意味で、この用法につかわれるばあい、動詞は動作性の一部をうしなっているということができよう。この点は、動作の進行をあらわす用法と対照的である。

この用法の「する」は、進行中の動作をあらわす「する」と同様、主文のテンポラリティー等を規準にした現在しかあらわさない。また、この用法の「する」に、しいて「いま」「そのとき」などをつけてみると、不自然なもの、ナンセンスなもの、不可能なものが出る度合いは、進行をあらわす用法よりはるかに多い。このことは、テンス性からの解放がいっそうすすんでいることをしめす。

23) 連体現在形の状態をあらわす用法の非動詞性は、いつもこの用法でもちいられることによっていちじるしく非動詞化される単語を発生させる。そのようにして変質した動詞、または、この用法でつかうために一定の造語法によってつくられた動詞は、動詞としてのカテゴリーをきわめて不十分にしか所有しない。いままであげた例のなかでも、「関する」「かさなる」などは、基本動詞⁽¹⁵⁾の終止形につかわれることはほとんどないだろう。こうして、この用法は、つぎの二つの方向で非動詞化への派生がすすんでいる。

その一つは、後置詞⁽¹⁶⁾ postposition への方向である。さきにあげた「関する」「むかう」「そう」、さらに「面する」「通じる」などは、そのまえの名詞と

のあいだに他のカザリをいれる余地がなく、その名詞にかたくむすびついていて、格形式の意味をたすけるはたらきをしており、かなりの程度に後置詞性をおびている。さらに、「対する」になると、この傾向がいっそうつよくなる。例文(67)(68)は「対した」「対している」にかえることもできない。

(67) 未開な文化に対する物めづらしさを (道標)

(68) 古い小学校に対する共通の思ひ出が (真知子)

もう一つは、形容詞・連体詞への方向である。「かさばる」などはその傾向をもっているが、「一きわまる」「一ある」のような複合語は、連体現在形しかもたず、また、はたらきの面でも、形容詞とおなじである。

(59) その一瞬の複雑きわまる口もとの皺をとらへた。(道標)

(60) 教ある若い人の中でも (桜の)

(61) 彼女のやうな教養ある婦人でなければ (真知子)

また、「こういう」「そういう」も(過去形をふくめて)連体形しかもたない。(条件形の「そういえば」は別語だろう。)

(62) かれはかういふ人達に比べて (時は)

(63) 老祖父, 老祖母, さういふ人々は皆死んで行った。(時は)

2

- 3 未来の動作をあらわす用法

24) 連体現在形が未来の動作をあらわす例は、わりにすくない。それが未来であることは、(64)(65)のように時の単語によって、あるいは、(66)(67)のように文または文脈によってしめされる。

(64) いま来るお客さま, 中国のひとつです。(道標)

(65) 彼等は頓て出逢ふスクリーンの女たちのために (真知子)

(66) 同級の学生でそこへ出席する連中は誰と誰であらうなどと (桜の)

(67) 良太は川舟の出る舟着の方へと急いだ。

連体現在形が未来の動作をあらわす用法につかわれるとき、動作主はあきらかで、動作性がつよい。また、これは文脈のささえを必要とはするが、未来をあらわすことはあきらかで、テンス性もはっきりしている。こうした点で、この用法は終止形と同様であるといえよう。

2-4 アクチュアルな用法のまとめ

25) 以上をまとめると、連体現在形のアクチュアルな用法は、つぎの三つと

なる。

- (i) 未来の動作をあらわす。
- (ii) 現在の動作の進行をあらわす。
- (iii) 現在の状態をあらわす。

(ii)から(iii)へいくにしたがって、テンス性がよわまる。(iii)ではテンス性が完全にきえてしまっているものもある。また(iii)では、状態性がつよく、テンス性がよわい。

(i)と(ii)の用法は、動作動詞によって実現される。(iii)は、状態動詞のほか、一部の結果動詞が一定の連語的条件のなかで、これを実現する。

(iii) の用法では、動詞はかなりのていどに動詞らしさをうしなう。この用法から、後置詞および形容詞相当の動詞を派生させる、ひろがりの方向がみられる。

2-5 ポテンシャルな用法

26) 動詞のポテンシャルな用法とは、動作・作用や状態の実現する個々の特定の時間が捨象され、その主体が潜在的にその動作・作用や状態をもっていることをあらわす用法である⁽¹⁷⁾。これには次の二つの傾向をみとめることができる。

- (i) 動作がくりかえしあらわれることをあらわす。
- (ii) 動作を潜在的な属性としてあらわす。

27) 動作のくりかえしをあらわす用法にはつぎのようなものがある。

- 68) 時々良太の家に遊びに来るお幾は、(時は)
- 69) …この姉の……単純さの中には、いつも真知子を驚かす或るものがあった。
(真知子)
- 70) そこあたのが時々見かける伸子だとわかると(真知子)
- 71) 良太は逢ふ人々にかう言って(時は)
- 72) 此の人が日頃出入する本町のある商家から、(千曲川)
- 73) 小父さんが釣に来てよく腰をかける石なぞが(桜の)

これらのうち(68)(69)をのぞいて、カザレ名詞は動作主をあらわしていないが、カザリあるいは文・文脈のなかでいつも動作主があきらかにされており、動作性はつよい。しかし、特定の時点での動作をあらわしていない点で、ポテ

ンシャルである。とはいえ、くりかえし動作のおこるはばは、現在をふくむ時間であって、このことは、やはりくりかえしをあらわす連体過去形が過去の時間はばにおけるくりかえしをあらわすのと対立しており、その点で、このくりかえしは、ひろい意味での現在にふくまれるだろう⁽¹⁸⁾。こうしたことは、すべて終止現在形の同様の用法と共通である。

28) 動作を属性としてあらわす用法のばあい、動作と動作主の関係と、属性と属性のもちぬしとの関係とは別な関係である。属性のもちぬしはカザラレ名詞によってしめされるので、カザラレ名詞が動作主をしめすばあいには動作主と属性のもちぬしが一致するが、そうでないばあいには一致しない。

文例(74)~(77)は、カザラレ名詞が動作主をあらわすばあいである。

- (74) ソヴェトの働く人々は (道標)
- (75) とても威張ってるなんて悪く云ふ人があるけれど (真知子)
- (76) 社会学と云ふ言葉を聞いてもびくびくする夫人が (真知子)
- (77) 北方の國の人を情熱的にする自然の諧調が (道標)

この用法のばあい、動詞は、一定の動作をあらわすが、その動詞を軸とするカザリ連語が全体としてカザラレ名詞でしめされるものの属性をあらわしている。

動作のくりかえしをあらわす用法と潜在的な属性をあらわす用法とはつながっていて、それぞれの実例は、その両面をそなえているようにみえる。この両用法のテンスは、観念型として、ことなっている。つまり、くりかえしをあらわす用法では、はばをもった現在のわくのなかでおこることをしめし、属性をあらわす用法では、現実の時から解放されている。しかし、実際には、その両タイプは両側面として、一つ一つの実例のなかにふくみこまれていて、一方の側面がより多くおもてにあらわれるにすぎない。

29) 動作を属性としてあらわす用法で、カザラレ名詞が動作主をあらわさないもののなかには、(78)~(81)のように動作主があきらかにされているものもあるが、あきらかにされていないもののほうが多い。

- (78) 伸子たちが借りることの出来る寝台が一つしかなくて、(道標)
- (79) ここでは人知れずさゝげる祈禱ではなくて、叔母さんから子供まで一緒にする感謝である。(桜の)

- (80) あの皆のほめる〇〇の多い西鶴の文章は(桜の)
 (81) 町人でも実力さへあれば何んなにでも立身出世が出来る世の中に(時は)

これらの例では、動作主をカザリの中の名詞がしめしているが、動詞は特定の時点における動作をしめさない。このカザリ連語は、全体としてカザラレ名詞のしめすものの属性をしめしており、その属性もかなり一般的な属性である。その意味で、動作性のウエイトはかなり小さいといえるだろう。

- (82) ほんとに気の晴れ晴れする室なんです。(道標)
 (83) 午券・人蔘などの好い野菜を出す土地だ。(千曲川)
 (84) 本式にボイラーをたく温室を拵へて頂きました。(道標)
 (85) をばさん、此処等に借りる地面はないでせうか。(時は)
 (86) 腰かけて休む粗末な茶屋もある。(千曲川)
 (87) 三階にのぼる階段で(真知子)
 (88) むかしはそこにモスクワへ入る一つの門があったものと見えて(道標)
 (89) 不揃着る着物なども(時は)
 (90) 箸と汁を入れる猪口とを取った。(時は)
 (91) 此間も、頭髪を刈るお銭もないって言って(時間)
 (92) お茶をのんだりする角テーブル一つと(道標)

動作主があきらかでないものは、動作性がさらによわく、カザリ連語が属性をあらわす側面がいっそう大きくおもてにでている。こうなると、動作との関係では問題となる、動作主か直接対象か間接対象かということも問題ではなくなり、ヴォイス性がきえる。(85)~(92)のカザリ連語は、目的=用途をあらわすというニュアンスをおびているが、このニュアンスは過去形にすると、きえる。このことは、それのもつテンス性のよわさをしめしている。つまり、属性をあらわす側面がさらにいっそう大きくうかびあがっているといえることができるであろう。

30) 以上をまとめるとつぎのようになる。

連体現在形のポテンシャルな用法には、つぎの二つの傾向がみとめられる。

- (i) 動作がくりかえしあらわれることをあらわす。
- (ii) 動作を潜在的な属性としてあらわす。

(ii)のばあい、

- (ii)-1 動作主と属性のもちぬしとが一致するもの。

(ii)ー2 動作主と属性のもちぬしとがことなるもの。

の二つがあり、さらに、(ii)の2には、

(iii)ー2ー2 目的・用途的なニュアンスをもつものがある。そして、これらは、上から下にくるにしたがって、動作性がよまわり、テンス性をうしない、動詞らしさを減じていく。

しかし、これらは、密接につながっており、きれいにわりきることはいない。

3 過去形の用法

31) 現代日本語動詞の連体過去形には、つぎの三つの用法がある。

(i) 過去の動作・作用・状態をあらわす。

(ii) 過去の動作・作用の結果が現在までのこっていることをあらわす。

(iii) 状態をあらわす。

このうち、(ii)は、(i)から(iii)への中間過程にあるものとして位置づけられる。(iii)のばあい動作・作用そのものは直前までにおこっているもので、そのことに注目すれば、(i)のなかにふくめたほうがよいかもかもしれないが、その状態性に着目すると、現在のことになり、しかも、(i)にちかいものから(ii)に近いものまで、ずっとつながっているもので、いちおう中間的なものとして一項をたてた。(iii)はふつうテンポラリティー等を規準にした現在のことがらをあらわしているが、あとでのべるように、そのテンス性を追求していくと、現在をあらわすとはいいがたいので、ただ状態としておく。テンスの面から規定するならば、「テンス的な意味がない用法」というべきであろう。(i)(ii)のばあい、連体過去形のあらわす過去は、主文のテンポラリティー等を基準にした過去であることが多いが、㊸～㊺のように、話し手の話す時点を基準にするばあいもある。

㊸ 其処にあった菓子をもたせた。(時は)

㊹ 第一列にゐた中年の女がすぐ首を横に振った。(道標)

㊺ あの時分は、死んだ祖父さんもまだ若かった。(時は)

㊻ さう言へば、明治十二三年に出た慧星が大きかった。(時は)

3-1 過去の動作をあらわす用法

29) 過去の動作・作用・状態をあらわす用法は、いろいろの動詞によって実

現される。

- (97) 明け方までつづいた雨が、小春日和の午後に晴れやかになごましてゐた。
(真知子)
- (98) 羽州で切腹した新見さんなどは一番つまらなかったな。(時は)
- (99) 先に弾いた二人よりもっと立派にできたとしても(真知子)
- (100) つかひ込みをして大きな穴をあけた社長(時は)
- (101) 先月、伸子がきいたオペラについて(道標)
- (102) 下の段にはお初が持って遊んだ人形だの、……(時は)
- (103) キョウダイガミンナセワニナックヲバガシンダ(時は)
- (104) 部屋を見に行った家の裏がはぐらゐのところが丁度大使館の見当だった。
(道標)
- (105) 石川はおてつと結婚した古い家の奥に、(時は)

32) この用法でつかわれる動詞は、動作性(状態動詞は状態性)がつよい。そして動詞のあらわす動作(状態)の主体は、カザラレ名詞によって(99~(100))あらわされることが多いが、カザラレやカザリの名詞によってしめされなればあいでも、いつも文または文脈によって((104)~(107))あきらかである。また、この用法でつかわれる動詞は、時(99)や原因((100)や目的((104))などの状況的なカザリをうけているものが多く、それをうけていないばあいでも、それをうける能力をもっている点は、状態的な用法とことなっている。このような点から、この用法でつかわれるばあい、動詞は動詞らしさをよくそなえているといえるだろう。

この用法のなかに、特定時の動作でなく、ポテンシャルな動作をしめすものがある。しかし、これらは、過去というひろい時間はばがしめされている点で、テンス性をそなえているというべきであろう。

- (106) 出たり入ったりした嫁が、たうとう不縁になって出て行ったが。(時は)
- (107) 食堂の廊下の柱、よく行った図書館の窓、(桜の)

3-2 動作の結果の状態をあらわす用法

33) 過去の動作作用の結果が現在までのこっていることをあらわす用法は、(i)と(ii)の中間に位置するもので、(i)にちかいものから(ii)にちかいものまで連続的にならんでいる。

34) その主体がカザラレ名詞によってしめされている主体結果動詞⁽¹⁹⁾が、

時のカザリをうけたりうけなかったりして、その動作の実現した時をだいたいあきらかにしているばあい、過去の動作をあらわす性格のほか、そのことによって生じた現在の状態をしめすニュアンスをおびる。

- (108) つい一月ほど前に開業した若い医者がやって来たが、(時は)
- (109) 中年で盲した母親が「……」と言って見えぬ限から涙を流した話(時は)
- (110) 森の中に近頃出来た茶屋、(時は)
- (111) 彼は七匹の飼犬の各々の名前や、その習性や、それに絡んで生じた逸話に就いて語らうとした。(真知子)
- (112) 日本の女に生まれた伸子に日本の心のほかの心がありやうはなかったけれども
(道標)

35) ゆくさき・出現場所をあらわすカザリをうけた移動動詞・出現動詞が主体をあらわす名詞をかざるばあい、動作が過去におこなわれたことと、その場所にいる(ある)状態であることを示す。

- (113) ホテルに戻った三人は(道標)
- (114) 真竹の籾に出た筍の大きくなって路傍に出てゐるのなどを(時は)
- (115) 何うしても西洋へ行った息子さんの行方がわからないとは(時は)

36) 主体結果動詞が、カザラレ名詞のあらわす主体の直前過去の動作をあらわすばあいに、この用法が実現される。

- (116) 亢奮で顔色をかへた素子は(道標)
- (117) 振り向いた彼女に慇懃な会釈をかけたのは(真知子)

主体結果動詞でない動詞が、カザラレ名詞のあらわす主体の、直前過去の動作をあらわすときでも、その動作をおこなったときの姿勢あるいは余韻が現在まで感じられることがある。しかし、これを文法的に「結果がのこっている」といえるかどうかは、問題である。

- (118) その瞬間、開けた関と顔を見合はせた。(真知子)
- (119) 「あら——真知子さん」行き過ぎて自分の方から見つけた富美子は(真知子)

37) 手にいれることをあらわす他動詞が手にいれたものをあらわす名詞をかざるとき、手にいれる動作と、主体がそれをもっているという状態と、由来的性質としての対象の属性をあらわす。

- (120) お母さまから頂いた金三円、僕の買った種これこれ、(道標)
- (121) 先祖から譲り受けた田地に僅か出たため(時は)

以上、文例(108)～(121)は、動作主が直接間接にあきらかであり、また、動詞が時のカザリをうける能力をもっており、過去の動作をあらわす側面がつよくていいる。

38) 対象結果動詞⁽²⁰⁾が対象をかざると、あとにのべるように、状態をしめす用法になることが多いが、時や動作のしかたなどがあきらかにされているばあいには、動作とその結果の状態をしめす。

(122) それは細君の好みで病中に造った未だ一度も手を通さない単衣であった。

(桜の)

(123) 心に溢れる訴へと恋着をこめて、書き連ねた若い多計代のつきない糸のやうな草書のたよりは、 (道標)

このくみあわせのばあい、動作主と状態のもちぬしとがことなる。(122)や(123)のように動作主があきらかであるばあいには、動作性(過去性)と状態性(現在性)とがあい半ばしているが、(124)や(125)のように、動作主のかげがうすくなると、状態性のほうがつよくなる。

(124) お婆さんは神棚の下の方から新しく染めた反物を持って来た。(桜の)

(125) 西南の役の後に建てた二階屋はもう古くなって(時は)

39) 主体結果動詞が主体をあらわす名詞をかざると、あとでのべるように、状態をしめす用法になることが多いが、動詞が原因やプロセスのカザリをうけるばあいには、その状態になるうごきの側面もはたらいて、動作の結果をしめす用法となる。

(126) 枕元から吸呑を取りあげ、病人の熱で干涸らびた唇へ持っていった。

(真知子)

(127) 段々おちついた伸子の心に(道標)

40) 「～に(～く)なった」という形式で変化をあらわすものも結果の状態をあらわす。この形式は、アスペクトの観点からは、変化動詞⁽²¹⁾になるばあいと、第四種の動詞になるばあいとがあるが、前者のばあい、連体過去形は、変化とその結果の状態をあらわす。(なお、後者のばあいには、「坂になった」「二枚一組になった」のように状態をあらわす。)

(128) 狂になった女が(桜の)

(129) 小さくなった制服のズボンの(道標)

(130) [酒によって] すこし鼻にかかるやうになった声で (道標)

41) 主体結果動詞が動作結果としての主体の状態をあらわし、カザリ全体として、カザラレ名詞のさししめす対象の状態をあらわすことがある。このばあい、状態性がつよくでているが、主体と対象との関係のなかで、主体のアクティブなようすがきえさらず、そのため、動作の結果の状態というニュアンスがのこっている。

(131) 両腕で横抱ひにした仲子を胸の前にもちあげたまま、ポリニャークはゆっくりした大股で、(道標)

(132) 着なれた洋服の (真知子)

(133) 抱いた児に乳房をふくませてゐるおてつの傍には (時は)

その対象がからだの部分であるばあいも同様である。

(134) ひろげた両脚の間にバケツをはさんで (道標)

(135) 左右の組み合せた手で頬を支へ (真知子)

以上のように、この用法は、テンス性がよわまってくると同時に、状態性が動作性をうわまってきて、しだいに状態をしめす用法にちかづく。

3-3 状態をあらわす用法

42) 連体過去形の状態をあらわす用法は、ほとんどのもの⁽²²⁾が結果動詞によって実現される。カザラレ名詞のさししめすものが主体であるばいには、主体結果動詞がつかわれ ((136)~(141))、対象であるばあいには、対象結果動詞がつかわれる ((142)~(146))。

(136) 多勢の盛装した下町風の娘達が (桜の)

(137) いかにも花柳界に馴れた外国人の感じだった。(道標)

(138) 深く陥没んだ地勢に添うて (桜の)

(139) 新しいパナマ帽を冠った技師だのリンネルの白い洋服を着た技手などが (時は)

(140) 撫で肩でなめらかな皮膚をもった断髪の素子が (道標)

(141) お城を取巻いた壕 (時は)

(142) 涼しい風が明放った広い室に満ち渡った。(時は)

(143) 病院の黒く塗った板塀が (真知子)

(144) 並木道に立って色糸でかがった毬を売っている (道標)

(145) ファイアプレースのやうに取りつけた電気暖炉には (真知子)

(146) 大きな鬘にさした髪の飾りも重さうに見える女の連れ (千曲川)

これらのくみあわせのなかで、動詞または動詞連語でできたカザリはカザラレ名詞のさしめす人やものの状態をあらわしている。ここでつかわれている動詞は、それ自身としては動作をもっているが、このくみあわせのなかでは、その動作のプロセスの側面はきえてしまって、動作の結果である状態の側面だけがうかびあがっている。あとでもう一度問題にするが、もしこれが述語でつかわれたばあいには、主体のとき ((136)~(141)) は「している」、対象のとき ((142)~(146)) は「してある」になる。ところが、ここでそれが同形であるのは、主体とか対象とかいう、動作に関連する面がきえてしまって、ただ、状態の面だけがでていいるからであろう。

対象のばあい、動作主がしめされていない。だれが明け放っても、だれが塗っても、ともかく、明け放たれていて、黒くぬられていれば、それでよいのである。ただ状態をしめしていればよいのである。主体のばあいも同じで、「盛装する」という動作において、だれが実際に手をくだしたか（一人でしたか、母親や髪ゆいにしてもらったか）は問題ではない。「娘達」が盛装した状態にあるということにすぎない。そのように、主体のばあいも動作から解放されている。「陥んだ」のばあいや「皮膚をもった」のばあいには、はじめからそういう状態であって、そうなったプロセスは、問題にすることさえできない。

このような、動作が状態に移行するプロセスのようすは、くつつき場所が状態のもちぬしになるくみあわせのなかで、いっそうはっきりする。

(147) その頃の彼はまだ金釦のついた新調の制服を着て居た（桜の）

例文(147)を動作の観点からトランスフォームすると、

a 金釦が 制服に ついた。

のようになり、「制服」は、くつつき場所である。そして「金釦」が動作主 agent であり、また主語 subject でもある。この動詞を状態のアスペクト動詞にかえると、

b 金釦が 制服に ついて いる。

となって、「金釦」は動作主ではなくなるが、そのかわり状態のもちぬしとなり、また依然として主語である。そこで、この文の陳述性をかえて、制服の属性をあらわす文にすると、

c 制服には 金釦が ついて いる。

または、

d 制服は 金釦が ついて いる。

のようになる。c のばあいには「制服」は、主題 *thema* であるが、主語は「金釦」である。d になると、「制服」は、主題と主語をかねることになる。そして完全に「制服」の状態＝属性をしめす文となる。

さきほどからわたしが「動作主ではなくて、状態のもちぬしである」といっているのは、こういうことを意味しているのである。

つぎのように、とりつけをあらわす他動詞⁽²⁸⁾がつかわれるばあいには、カザラレ名詞のさししめすものを主体ととるか対象ととるかによって、「している」「してある」の両様にトランスフォームすることができる。このことは、こういうくみあわせでは、動作性が完全にうしろにひっこんで、状態性だけがおもてではたらいっているのだということを裏づける一つの証拠になるだろう。

(148) 薬種を並べた店の借手から (桜の)

(149) 歌は雄々しさと憂愁とをこめたメロディで (道標)

43) この用法のなかには、カザリのなかで動詞が部分や存在物の状態をあらわすことによって、カザリ全体として、カザラレ名詞のさししめす人やものの状態や属性をあらわしているものがある。

(150) さきのとんがった、赤い星のぬひつけられたフェルトの防寒帽をかぶって、
(道標)

(151) 胸の窪んだ、ひよろ長い身体を (真知子)

(152) そのあたりは耕地の続いた野で (千曲川)

(153) 同じ黒の薄手のショールに襟元を包んだ未亡人 (真知子)

(154) かどを落した横長の四角にかこまれて (道標)

なお、述語になったばあい、(150)~(153)は「している」、(154)は「してある」となる。

44) この用法のなかには、動詞が結果のカザリをうけるもの、((155)~(159))、材料のカザリをうけるもの ((160)~(161))、とりつけ場所のカザリをうけるもの ((162)~(163))などがあるが、こうしたばあい、動詞よりもそういうカザリのほうが情報としてきいているようであり、そこにも、つよい状態性がうかがえる。

- (155) 色白でまるまると肥った女と (桜の)
 (156) その正面玄関の黒くよごれた鉄唐草の車よせの下から (道標)
 (157) 不規則なS字型に屈折した路が (真知子)
 (158) 虹のやうな色のとりあはせに組んだ絹紐が (道標)
 (159) 丸煮にした鶉の肉を (真知子)
 (160) 黒い布でこしらへた沓をはって (道標)
 (161) 海老、橙、裏白、ゆづり葉などで飾った大きな輪かざりの (桜の)
 (162) 窓よりに置いたテーブルに向って (道標)
 (163) 尼寺の傍の空地に建てた平家には (時は)

45) 連体過去形がこの用法でつかわれるばあい、とくに一語の動詞がこの用法でつかわれるばあいに、ていどのカザリをうけることがある。ていどのカザリは、動詞よりも形容詞にかかることのほうがふつうであり、その意味で、こうしたものは、形容詞的な側面をつよくもっているといえる。

- (164) よく似た老婦人が (真知子)
 (165) ひどく威張った、気むづかしい母堂のこと (真知子)
 (166) 関は黒いやゝ乱れた髪毛に蔽はれた、その形のよい頭を (真知子)
 (167) 半ば酔った石川は (時は)
 (168) その当時としては最も進んだ講演の聞かれる楽しみを (桜の)

46) 連体過去形の状態をあらわす用法は、終止過去形にはない。述語でこれをあらわすには、アスペクト動詞「している」「してある」をつかわなければならない。「している」「してある」は、ともに結果の状態をあらわすが、「している」は主体の状態、「してある」は対象の状態をあらわして、そのヴォイス性がことなる。ところが連体過去形「した」は、その両者のばあいにつかわれ、ヴォイス性に無関心である。

アスペクト動詞「している」「してある」と連体過去形「した」とのあいだにみられるこのちがいは、「動作の結果の状態」と「状態」とのちがいはなかろうか。状態が動作とからんでいるとき、動作というものにつきものである主体や対象が状態にもくっついてくるが、状態が動作から独立すれば、その主体や対象の概念もぬけおちる可能性がでてくるのだとは、かんがえられないだろうか。

47) アスペクト動詞と連体過去形との、もう一つのちがいはテンスである。アスペクト動詞は、「している」「してある」という現在形と、「していた」、「し

てあった」という過去形をもって、形のうえからも意味のうえからも、現在と過去とが対立している。ところが、この用法でつかわれる連体過去形「した」は対立形をもたず、もし過去の状態をいいたければ、アスペクト動詞の過去形をかりて、「していた」「してあった」にしなければならない。

それでは、この用法の連体過去形が現在をあらわしているかということ、それもあやしい。「している」「してある」は「いま」でかざることができるが、連体過去形「した」を「いま」でかざると、たちまち過去の動作をあらわす側面がうかびあがってきて、この用法でなくなってしまう。しかし、「いつも」なら、かなり不自然なものがありはするが、ともかく、状態をあらわす用法の範囲内でこれをかざることができる。このことから、この用法が、現在という特定時の状態をあらわしているのではなく、もっと一般的な状態をあらわしているのだといえるだろう。

このように、動作性の側面がきえてしまうと、アスペクトからも解放されているといわざるをえない。なぜなら、アスペクトというのは、動詞のあらわすことからの、動作のプロセスとの関係であられるすがたなのだから。

動作性がよわく、テンス性もなく、アスペクトからも解放されているとすれば、この用法でもちいられた連体過去形は、もはや動詞らしさからほどとおくへだたっているといわなければならない。

48) 連体過去形の状態をあらわす用法の非動詞化の傾向は、いつもこの用法でもちいられることによっていちじるしく非動詞化する単語を発生させる。そのようにして変質した動詞⁽²⁴⁾、多義語のうちの特定の意味、あるいは、この用法でつかうために一定の造語法によってつくられた動詞、または一定のくみあわせ法によってつくられた動詞フレーズは、動詞としてのカテゴリー語形をきわめて不十分にしかもたなくなるのである。

たとえば、「そびえた」「いりくんだ」「完備した」「ばかげた」「はれわたった」「きまりきった」などは、この用法、または「して」「している」の形でのみ用いられる単語であり、「困った」「死んだ」「もちあがった」などのもつ特定の意味は、この形にしかつかわれない。

(169) 捨吉はごちゃごちゃと入組んだ河岸のところへ出た。(桜の)

- (170) まっ青に晴れわたった朝の大空に (真知子)
 (171) どうも困った人だなあ。(其面影)
 (172) 古い死んだ歌の言葉が其時捨吉の胸に生きてきた。(桜の)
 (173) 小高く持上った岡の (桜の)

特定の造語法やくみあわせ法をもつものの例は、50) でのべる。

49) 連体過去形の状態をあらわす用法の非動詞化傾向の一つは、後置詞への派生としてあらわれる。後置詞への派生は、空間と関係の分野で実現する。

「面した」「むかった」「ならんだ」「そった」「つづいた」「接した」「はなれた」などは、空間的な後置詞への方向をあゆんでいる。

- (174) 小公園のやうな植込みに沿ったひろい歩道は (道標)
 (175) 座敷に面した庭なども見事であった。(時は)

「からんだ」「かかわった」「関係した」「釣りあった」「反比例した」「むいた」「相応した」「もとづいた」「立脚した」「準じた」「似た」「ちがった」などは、関係的な後置詞への方向を進んでいる。

- (176) 久しぶりの教師に絡んだ中学時代の思ひ出が (真知子)
 (177) お嬢さんには向いた学問でございますもの、ねえ。(真知子)

後置詞への派生傾向は、状態をあらわす連体現在形のばあいと同様である。いまあげた例も、大部分は現在形にかえてもさしつかえない。

50) 非動詞化のもう一つの方向は、形容詞的用法を本務とする動詞への派生である。これも、連体現在形のなかにもみられるが、過去形のほうが圧倒的に優勢である。この傾向は、(160)~(163)にみられるように、単語ごとに個別的にもあらわれるが、特定の造語法またはくみあわせ法によってつくられるものが多い。これには、いくつかのタイプがある。

名詞+結果動詞……年とった、氣どった、色づいた、色あせた、手ずれた、水ざわだった、など

接頭辞+結果動詞……うすよごれた、ものなれた、ものさびた、など

名詞+接尾辞……汗じみた、いなかじみた、お嬢さんじみた；骨ばった、角ばった、かさばった；紫がかった、灰がかった；黄ばんだ、あせばんだ；くろずんだ；貴族ぶった；おとぎばなしめいた；おとなびた、ひなびた、古びた；かんずった、うわずった、など

～した(1)……ちよつとした，しっかりした，しょぼしょぼした，こまごま
した，など

～した(2)……ああした，こうした，そうした

～と+した……ちゃんとした，ひろびろとした，ひっそりとした，森閉と
した，莫然とした，など

～に+なった，～する+ようになった……坂になった，時代分けになっ
た，しぜんにまわるようになった，など

3-4 過去形の用法のまとめ

51) 現代日本語動詞の連体過去形は，つぎの三つの用法をもつ。

(i) 過去の動作・作用・状態をあらわす。

(ii) 過去の動作・作用の結果が現在にのこっていることをあらわす。

(iii) 状態をあらわす。

(i)は終止過去形と同様，動作性がつよく，テンスもはっきりしている。(iii)は動作性の面がきえて，状態性が大きくうかびあがっている。(ii)は(i)と(iii)の中間的なものであって，(i)にちかいものから(iii)にちかいものへの過程のなかで，いろいろの段階のものをみいだすことができる。

(iii)の用法の状態性のつよさは，連体現在形の状態の用法とくらべても，優位にたつ。(ii)の用法では，テンス性もよわく，現在をしめすというよりも，テンスから解放されていて，動詞らしさをうしなっているていどがはなはだしい。

(iii)の用法から後置詞および形容詞相当の動詞を派生させている。前者は，連体現在形と同程度であるが，後者は，いちじるしく優勢である。

4 む す び

52) 以上にみてきたように，現代日本語の連体形は，終止形とかなりちがった用法をもっている。現在形では，現在進行中の動作をあらわす用法，結果動詞によって状態をあらわす用法などが，また，過去形では，結果の状態や状態をあらわす用法が，それぞれ終止形にないものであるが，それらの例がかなりの量をもって主要な位置をしめているので，連体形の用法の中心は，終止形のそれからずれているといえることができるだろう。

53) これらの連体形特有の用法は、度あいはことなるが、すべて、テンスから解放される傾向をもって、そのことから、結果的に多くのものが、主文のテンポラリティー等を基準にした現在をあらわしている。このことは、終止形のばあい、過去形はもちろんのこと、現在形でも現在のことがらをアクチュアルにあらわす用法がひじょうにすくないのと対照的である。

54) 連体形におけるテンス性からの解放の傾向は、その動作性と状態・属性性との交代の傾向と並行している。それにしたがって、カザラレ名詞は、動作主や動作対象の地位から状態や属性のもちぬしの地位へ移行する。そしてこの過程において、動詞のもつヴォイス性がよわまりうすれてくる。(このことは、おそらく連体という機能からくる自然の傾向であろう。英語でリンゴを二種類にわけて eating apple, cooking apple などというとき、active の分詞がつかわれているのも、おなじような事情によるものとおもわれる。)

55) 終止形では、現在形と過去形の対立は、《現在・未来 \longleftrightarrow 過去》というテンスの対立を内容としている。連体形のばあい、この対立もあるが、そのテンス性がよわまるにつれて、《進行 \longleftrightarrow 状態》というアスペクトの対立があらわれ、それが大きな位置をしめてくる。

56) 動詞は、連体形としてつかわれることによって、終止形からのズレを生じ、そのズレにのっかることを専門とする単語やフレーズを発生させる。こうして状態をしめす用法からは、後置詞のような品詞、あるいは形容詞相当の用法しかもたない動詞を派生している。また、現在形のポテンシャルな用法のなかの用途をあらわす用法なども、形容詞的な方向に発展しているのかもしれない。現在形の進行をあらわす用法から形容詞化へ発展する傾向は、はっきりと確認することができなかったが、「道行く人」の「名詞(ナマエ格) + 動詞(連体現在形)」のような連語の存在は、この発展傾向をとらえることの可能性を示唆している。

57) 本稿では、動詞の連体形のテンスの面については、積極的な分析をこころみなかった。そして、話し手の話している時点を基準にしたものと主文のテンポラリティー等を基準にしたものとのちがいについて追求しなかったし、また「主文のテンポラリティー等」といういいかたで一括したものの中味の分析

も種類わけもしなかった。このことから、おそらくいくつかのあやまりを生じているとおもう。とくに、テンス性の有無・軽重についての考察は、このために非常によわくなっているとおもう。これは、のこされた問題である。

5 注

- 1) 時枝 1950, 198~199ページ。
- 2) 松村 1969, 152~153ページ。
- 3) 松村 1971, 410~411ページ。
- 4) 吉田 1971, 236~239ページ。
- 5) 鈴木 1965, 2ページ。
- 6) 「している」「してある」「してしまう」「しておく」「していく」「してくる」「しつつある」「しはじめる」「しつづける」……などは、アスペクトをあらわし、「している」「していた」「していよう」「している」……というふうには、基本動詞「する」と同様、いろいろな語形をとる。この「している」「してある」……などは、基本動詞から文法的に派生して、アスペクトをあらわす動詞であるので、アスペクト動詞とよぶ。さきあげたパラダイムのなかでは、ヴォイス動詞（「される」「させる」など）、やりもらい動詞（「してやる」「してもらう」など）などとならんで、基本動詞の下方に位置づけられる。

- 7) 金田一春彦は（金田一 1950）、動詞を、状態動詞・継続動詞・瞬間動詞・第四種の動詞に四分類した。状態動詞は「している」にならず、「する」の形で状態をあらわすもの、継続動詞は「している」の形で進行をあらわすもの、瞬間動詞は「している」の形で結果の状態をあらわすもの、第四種の動詞はいつも「している」の形で状態をあらわすものである。（紙面節約のため、要約した。）

わたしが「動作動詞」とよんだのは、その「状態動詞」以外のものである。ここで「状態動詞相当になりうる結果動詞」とよんだものは、第四種の動詞とある程度かさなるが、かなりずれるので、「第四種」という分類項をつかえなかった。

藤井正は（藤井1966）、金田一の「継続動詞」と「瞬間動詞」の二分法をあらため、図のような十字分類による四分類とした。結果動詞は、「している」の形で動作の結果の状態をあらわすもの、継続動詞

	継続動詞	瞬間動詞
結果動詞	着る	死ぬ
非結果動詞	読む	知りあう

は、「している」の形で動作の進行をあらわすものである。わたしが結果動詞といったのは、藤井の用語によるものである。

- 8) 吉田 1971, 236ページ。
- 9) 松村 1969, 152ページ。
- 10) わたしは（高橋 1969）、「している」が結果の状態をあらわすときは主体の結果

の状態をあらわし、「してある」のばあいと、アスペクト的にはおなじであり、ヴォイス的な側面がことなるのだとした。これをうけて、吉川武時は(吉川 1971), 「している」の形で主体の結果の状態をあらわすものを「主体結果動詞」, 「してある」の形で対象の結果をあらわすものを「対象結果動詞」とよんだ。わたしは、この用語にしたがうが、ばあいによって、両方または片方をただ「結果動詞」とよぶこともある。

- 11) カザリとカザラレは、連語論の概念である。連語論は、修飾と被修飾の関係の名づけ的な側面を文のなかからとりだしてあつかう分野である。(くわしくは、鈴木康1971)
- 12) 鈴木 1965, 5~19ページ。
- 13) 動詞の種類についての用語は、注7)を参照。
- 14) この「結果動詞」は、金田一の「第四種の動詞」とかさなるところもあるが、かなりちがうので、それによらなかった。
- 15) 基本動詞とは、「している」「してある」などのアスペクト動詞、「される」「させる」などのヴォイス動詞などを派生させるもとになっている動詞、つまり、「する」のことである。「よんでいる」「よませる」などに対して、「よむ」が基本動詞である。さきにあげたパラダイム参照。
- 16) 後置詞とは、名詞のあとにおかれ、名詞の格を支配しながら、その名詞の格のはたらき(他の単語にかかって、一定の関係をしめすはたらき)をたすける単語のことである。前置詞とおなじはたらきをするが、おかれる場所がちがう。格助詞を後置詞とする説があるが、助詞は名詞にくっついて名詞の格形式をつくる接尾辞であり、また、格支配もしないので、後置詞ではない。
- 17) 鈴木 1965, 13ページ
- 18) 鈴木 1965, 14ページ
- 19) 注10)をみよ。
- 20) 注10)をみよ。
- 21) 「している」の形で結果の状態をあらわし、「してくる」「していく」の形で変化をあらわすもの。「ふえる」「なつく」など。結果動詞に属し、継続動詞と瞬間動詞の中間に位置づけられる。(吉川 1971, 143ページ)
- 22) 非結果動詞の例も、すこしある。
 - 真知子が少し驚き、見張った、活き活きした黒眼で、(真知子)
 - 三十分の休憩時間を利用した客で眠ってある料亭の茶卓は(真知子)
- 23) とりつけのむすびつきをあらわす連語、つまり、なんらかのし方である物が他の物(第二の対象)にくっつけられることをあらわすむすびつきをつくる単語。(奥田1968, 29~30ページ)
- 24) 25) 金田一の第四種とかさなるものが多い。

6 引 用 文 献

- 奥田靖雄 (1968) 「(日本語文法・連語論) を格の名詞と動詞のくみあわせ (一)」教育国語12, 169~183ページ, 麦書房
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」言語研究15, 48~63ページ
- 鈴木重幸 (1965) 「現代日本語の動詞のテンス——言いきりの述語に使われたばあい——」ことばの研究, 第2集, 1~38ページ, 国立国語研究所
- 鈴木康之 (1971) 「連語論のために」言語語叢11
- 高橋太郎 (1969) 「すがたともくろみ」*教育科学研究会国語部会第一回文法特別講座, テキスト 1~43ページ。
- 時枝誠記 (1950) 「日本文法 口語篇」岩波書店
- 藤井 正 (1966) 「『動詞+ている』の意味」国語研究室五, 55~79ページ。
- 松村 明 (1969) 「古典語現代語助詞助動詞詳説」学燈社
——「た」(だ) <現代語>」(執筆は田中章夫)
- 松村 明 (1971) 「日本文法大辞典」明治書院
——「た」(執筆は田中章夫)
- 吉川武時 (1971) 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」* Monash University マスター論文 (Melbourne)
- 吉田金彦 (1971) 「現代語助動詞の史的研究」明治書院
- なお * 印は, 未公刊プリントである。